
恋は盲目

sakura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋は盲目

【Nコード】

N8317Y

【作者名】

sakura

【あらすじ】

新米刑事の高崎沙織は捜査中の事故で記憶喪失になってしまった。彼女の相棒であるベテラン刑事橋本和宏はそんな彼女の記憶が戻ってくれることを願いながら、やがて彼女に心をひかれていく。

当作品は、ツイッターで話題になっているオジプラス話をモチーフにしています。

こんなエピソードもあつたらいいのに！ っていうのも募集しております。突貫工事ですが、どうぞよろしくお願いします。（*・・・

（＊――） 突然書き始めたので設定が迷走しています。かみ
あつてないところは順次なおしていきます。

設定

当作品は、ツイッターで話題になっているオジプラス話をモチーフにしています。

おっさん×女の子をテーマとした恋愛話です。

登場人物紹介

* 高橋沙織

キャリア官僚の一人だが、お嬢様で箱入り娘。頭は切れるがかなり世間知らず。愛称をクシュ

* 橋本和宏

ノンキャリアの刑事。

現場一本のたたき上げ。

少しずつ、ヒロインに惹かれていく。警察内部では人気があるが、本人は結構な野暮天で仕事に明け暮れているため、何人かの女性とつきあったものの結婚にまで及ばず、婚期を逃して今に至る。

1 目覚め

瞳を上げた。

彼女が。

「……おい」

声が聞こえて、彼の相棒とも呼べる女性は視線を横に移した。

低い声。

男の声だ。

高崎沙織は彼の眼差しを受けてから、ゆらりと視線を彷徨わせる。肘について上半身を起こした彼女は病衣をまとった胸元をそれほど大きくはない手でそつと押さえた。

「あなた、誰……、ですか？」

問いかける声が不安げに揺らぐ。なにに不安を感じているのか、とか、そんなことを男には聞けなかった。

「高崎、記憶が……？」

「記憶？」

なにを言ったらいいのかわからないらしい彼女は困惑したように彼を見つめた。

「いや、いいんだ」

男も困ったように彼女を見下ろすと、ため息をついて持っていた花束を看護師に手渡した。

「軽い脳震盪ですよ、心配いりません」

そう言いながら看護師は花束を受け取って病室を出て行く。

そうして、二人きりになった病室に沈黙が流れた。

「あの……、わたし、脳震盪なんですか？」

問いかけた高崎沙織に彼は苦笑した。

「あー……、まあ」

「教えてください、なにがあっただんですか」

そのことに対する不安感が、彼女にそんな瞳をさせているのだと思

うと胸が痛んだ。

彼女は、こんなところで立ち止まっっていていい女性ではない。

「君は、自分が警察官であることは覚えているか？」

問いかけると、彼女は首を傾げる。

「わたし、警察官なんですか？」

そう尋ね返しながら、彼女は不安げな面持ちのままできよろきよると病室の中を見回した。

聞いている事に質問で返されて、男は今までにないことに当惑した。

自分も警察官である以上は、今まで何度となく危険な事故や事件は目の当たりにしてきた。しかし、目の前の彼女のように、脳震盪で彼女のような反応を見せる者を見るのは初めての経験だった。

「君の名前と、年齢を言ってみろ」

「名前と、歳ですか……」

まるで「なにを言っているんだろう」とでも言いたげな彼女の瞳。しかしそれでも、彼女は困惑しながらも男に告げた。

「高崎沙織、十五歳」

「……」

彼女の言葉に絶句した。

「ここ、ニューヨークじゃないですね？ どこですか？ どうしてわたし、こんなところにいるんですか？」

彼女が矢継ぎ早に問いかける。

「それに、おじさまは？ どうしてわたしの名前知ってるんですか？」

思わず詰め寄るような勢いで、男の胸元に手を伸ばした彼女は不意に後頭部に痛みを感じたのか体をすくませた。

「……いつ！」

悲鳴が上がる。

後頭部を押さえた手が震えていた。

「おい、大丈夫か？」

2 記憶喪失

高崎沙織。

それが彼女の名前だった。

アメリカ帰りの帰国子女で、いわゆる飛び級を経験した超エリートらしい。

らしい、というのは彼がそれらの点について彼女に聞いたことがほとんどないからだ。彼女自身もそれを無作為にひけらかすようなことを好まない、いわゆる大和撫子然とした性格だったからアメリカでの学生時代についてほとんど語らなかった。

時折、通訳などをこなす程度である。

正直なところ、キャリア官僚というものに対して良いイメージを持っていなかった橋本和宏は、彼女に引き合わされるまで「どうせガリ勉タイプの嫌み女だろう」くらいにしか思っていなかった。

「……こんにちは」

ぺこりと頭を下げた彼女は、腰まで伸びた長い黒髪を揺らしている。どこか幼げな印象は年齢不詳にも思わせた。

彼と彼女が出会ったのは、まだ高崎沙織が二一歳のときだった。

飛び級を経験した超エリート。

要するに、橋本和宏は世間知らずのエリート官僚の卵のお守り役としてあてがわれたのだった。

それを苦々しく思っていたのだが、捜査一課に配属された彼女は朝早くから出勤してきて毎日のようにオフィスの掃除に明け暮れていたものだった。

最初は、エリート官僚がいい気味だと思っていたのだが、それが何ヶ月も続くととなるとやがて、それはそれでなぜだか嫌みのようなものを感じるようになった。

この変わり種のエリート官僚が、特別な存在だと知ったのはそれからしばらくたってからのことだった。

当時は警部補だったが、もう少しで警部に昇進するはずだった。その矢先の事故である。

犯罪捜査に当たっていた橋本和宏と高崎沙織は犯人グループとのもみ合いで、壁にたたきつけられることになった彼女は脳震盪を起こして意識を失った。

そして、昏睡状態が続くこと一週間ほど。

やっと目を覚ましたという次第である。

彼女が名乗った名前は確かに、彼女自身の名前だったが、自称する年齢と彼女の口から放たれた地名を見ると、どうやら脳震盪を起こしたせいで記憶の一部が欠落しているようだった。

「……高崎？」

後頭部を押さえてうつむいた病衣の彼女の肩に触れようとした男は、思わずその細さに息を飲んだ。

「大丈夫です、ちよつと痛かっただけなので」

言いながら顔を上げた沙織はにっこりと笑いながらベッドの上に横になる。

長いため息をついて、不安げな眼差しを窓の外に放っていた。

「おじさま、日本の方ですね？」

「ごめんなさい、ちよつと状況の把握が追いつかなくて……」。

そう言いながら笑う。

よくよく考えれば、橋本和宏は彼女の身の上のことを何も知らない。

「ご両親に、連絡したほうがいいよな？」

和宏の言葉に、沙織は睫毛を伏せると首を横に振って見せた。

「いえ、両親はいないので……」

両親がいない。

その言葉にどきりとした。聞いてはいけないことを聞いてしまったのではないかと、後悔する。

「ごめんなさい、少し眠らせてください……」

そう言いながら彼女は眠りに引き込まれていく。

開け放たれた窓からは初夏の穏やかな風が舞い込んだ。そして、
彼女の黒髪がふわりと揺らした。

それが、彼と彼女の「二度目」の出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8317y/>

恋は盲目

2011年11月24日20時51分発行